

小・中・高校生の部

入賞

広島県知事賞

知ることの意味

呉市立蒲刈小学校六年 井上 和波

白い砂浜がすきとおる空の青に続く
キラキラ光る波
エメラルドグリーンの海

赤に黄

青に緑に黄

サンゴや熱帯魚

色とりどりの生き物たち
どこまでも 一匹一匹 一つ一つが
はつきり 見える

風でゆれるフクギの木
色あざやかなハイビスカス

夕焼けの海に沈む太陽
沖繩の自然は：

七十九年前

この自然の中で
何千何万の人の命が
失われたことを知った
たくさんの命が失われたことを
ぼくは 気づかなかった

自然の美しさは
平和の大切さを
命の尊さを
訴えていたんだ

自然の美しさにみせられて
自然のすばらしさに 心ひかれて
気づかなかった たくさんの悲しみ

「平和の礎」

刻まれた尊い命が
静かに 力強く
ぼくに語りかける

歴史を知ることの意味を
教えているんだ

現 代 詩 部 門

広島県議会議長賞

雨

雨がふると
雨のにおいがする
しめったにおい
くもりのにおい
ちよつとワクワクするにおい
においがしないくらいのおい
ザンザンぶりになったら
びしょびしょになりたくて
私はブランコをこぐ
服がもう水を吸えなくなるまで
雨を楽しんだら
家に帰って
ざぶんとお湯に満たされる
雨を全部流すと
ふいに
雨のにおいがする

県立広島中学校二年 三宅美葡子

現 代 詩 部 門

広島県教育委員会賞

決意

県立広島皆実高等学校三年 荒田川咲季

夏の日の夕方

自転車を漕いでいた

遠くで陽炎がゆらゆらと揺れている

信号が赤になりわたしはため息をついた

ペダルを止めるのは面倒臭い

赤という色を見るだけで暑さが増す

わたしは木陰で自転車をとめ信号が変わるのを待つ

ハンドルを持つ手に全体重を預け俯いた

制服に汗が滲む

体にまとわりつく熱気

狂ったように鳴く蝉の声が耳を刺激する

こめかみを伝った汗が地面にポツリと落ちた

それを合図に広がるわたしの後悔

きつとなんとかなるだろうという根拠のない

曖昧な自信

集中力がなく努力ができない自分

同じスタートラインに立っていたはずなのに
気がつくとき追いつかざれ置いていかれている現状

信号が青になりわたしは怠惰に自転車漕ぎ始める
風を浴びたくて空を見上げた

蝉の声はびたりと止み空に桃色の雲が薄く広がっていた
一日の終わりを告げる穏やかな空

美しい世界に気づくことができる自分に喜んだ

周りに置いていかれたとしても自分のペースで
少しずつ進もう

全速力で長く走り続けることは難しい
立ち止まってしまった人の背中を

そっと押せるような人間になりたい

曖昧な自信を前向きな感情に底上げするためには
いつも努力が必要なのだ

ずっと心の底ではわかっていた
目を背けることなく現実と向き合うことで見えてくる
自分がある

わたしは「よし」と声を出してペダルを強く踏み
立ち漕ぎで帰途についた

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

お兄ちゃん

海田町立海田小学校三年 北島 彩羽

お兄ちゃん 遊ぼ

やだ あとでね

お兄ちゃん 勉強おしえてよ

やだ 自分でやりなさい

お兄ちゃん 一緒におふる入ろ

やだ

お兄ちゃん 一緒にねよう

やだ ぬいぐるみと ねて

お兄ちゃん いつから

やだやだまんに なっちゃったの？

やだやだまんのお兄ちゃんなんて 大きらい

でも 勉強しようと思って ノートを開いたら
次の日 書いてあったよ
今日は 一緒にねようねって

やった〜

やっぱり お兄ちゃん 大好き

広島市長賞

切

ハッ

シヤキ シヤキ シヤキ

シヤキ シヤキ シヤキ

シヤキ シヤキ シヤキ

シヤキ シヤキ シヤキ

シヤキ シヤキ シヤキ

シヤキ シヤキ シヤキ

シヤキ シヤキ シヤキ

シヤキ シヤキ シヤキ

シヤキ シヤキ シヤキ

何でもかんでも切つてやる

シヤキ シヤキ シヤキ

シヤキ シヤキ シヤキ

シヤキ シヤキ シヤキ

シヤキ シヤキ シヤキ

シヤキ シヤキ シヤキ

シヤキ シヤキ シヤキ

福山市立城東中学校二年 能浦凜太郎

シヤキ シヤキ シヤキ
シヤキ シヤキ シヤキ
シヤキ シヤキ シヤキ
シヤキ シヤキ シヤキ
俺に切れない相手はいない
シヤキ

広島市議会議長賞

しらなみごころ

広島市立千田小学校五年 橋本 知春

わたしは うみでできる

しらなみです

ふねがとおると

じゃぶん じゃばん

じゃぶん じゃばんと

海水を

ゆらして ゆらして

ゆらしまくって すごします

わたしのともだちは

どうろでできる

しらなみちゃん

わたしは大きな音で

じゃぶん じゃばん

じゃぶん じゃばんと

いうけれど

どうろでできる

しらなみちゃんは
ばしゃつと
それほど大きくない音

かわいすぎる
アイドルのような音をかなでる
どうろでできる
しらなみちゃんに あこがれる

どうろでできる
しらなみちゃんは
しごとがあんまりないからね
らくなんだと思っただよ

晴れの日とくもりの日は
どうしてるんだと
かんがえた

台風十号きたつぎの日に
きいたんだ

晴れの日とくもりの日は

ひますぎて たいくつ
しかも
車の少ないところはね
しごとがないって言ってたの

そんなのわたしは
ぜったい ぜったい ありえない

わたしは
まいにち まいにち
いそがしくって
ずっとずっと しごとなの

それでもわたしは
しごとがね すきだから

やっぱり
いまのままがいい

現 代 詩 部 門

広島市教育委員会賞

コレクシヨン

僕は筆記具として生まれてきた。

静寂の中に一つの足音。自分が手に取られる。しばらくして箱を開けられ、眩しい光が差し込む。これから使われるんだな。そう思った矢先、大きいガラス製のケースの中へ入れられた。一度のノックもなしに。

ケースの中には、僕と容姿がよく似た色違いが数本いる。みんな、死んだ目をしている。希望を失った人のように。

目の前のデスクで、人がカメラに向かって喋り始めた。そのうち、僕たちにカメラが向けられ、紹介？をしているのだろうか、鼻を高くして喋っている。

「これを持っている人はすごい。」
なんて言葉も聞こえてきた。

福山市立城東中学校二年 尾崎 光雄

そうか、僕を含めたみんなは、飾られるために、人に自慢するために生まれてきたんだ。
「筆記具」として。

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

きつとできる

できるかな できないかな
それより こわい

できるかな できないかな
できそうな気もする でも一歩が

どうして できるんだ
手をついた とんだ 次の台にとび乗った
はやくて 次々にくり出される技 技

できるかな やりたいな
上手な人の技をコマ送り
地面をけって 手をついたら つき放すんだ
体を曲げちゃいけないんだ……

頭の中で再生ビデオのコマ送り
頭の中で練習する

呉市立蒲刈小学校五年 濱下莉杏良

何度も 何度も コマ送り

やりたい やりたい

できるぞ できるぞ

自分を信じて…

こわいを消して

できる できる

きつと できる

タッタッ トン

ジャンプ ポン

キレ者

福山市立城東中学校二年 吉岡 凜珊

私はキレやすい
だって
切れやすいから

チヨキチヨキチヨキ
今日はいっぱいキレた
みんな
私を使ってキレさせようとする
でも

切るのは得意だし楽しい
働く時間が終わるのは嫌
ふたをされるから

今日の仕事はもう終わり
明日また

現代詩部門

い
っ
ぱ
い
キ
レ
た
ら
い
い
な

あいつ

ぼくの先祖はエライんだ！

時にはどこかの殿さまに

時にはキレイな絵巻物を

あんなにでっかい大仏に

目を入れたのも

誰もが憧れる

ぼくのじいちゃんだ

これはぼくのほこりである

そしてぼくもじいちゃんのまねをして

かっこいい人生をたどるんだ！

たどるはずだったけど

あいつのせいで・・・

ぼくは一週間に二度くらいに使われる

他は全部あいつが

あたりまえのように使われている

あいつの先はかたくてまるくなる

それにたまたま折れて使えなくなる

それに比べてこのぼくは
折れることなくしなやかに舞い
すばらしい字をかけるのに
悔しい

とにかく悔しい
ぼくがあいつに負けるはずがない
いつか、あいつをこえてやる
いや、今日でもこえられる
だって

ぼくは

誰よりもだんぜん

エライんだから！

夏

県立広島皆実高等学校三年 成藤 万葉

誰かが夏に向かって私の背を押した

振り返ると街路樹から声が聞こえた

ああ 蝉が鳴いている

彼らは泣き虫だ

樹の下を歩くと彼らの嘆きが降ってくる

昼夜の区別なく声を振るう彼らは何をそんなに

泣くことがあるのだろう

やすらかに土の中で眠っていた子供時代であったのに

目を閉じると街路樹の匂いがした

ああ 濃い緑の香りがする

彼らは夢想家だ

太い幹は大きな野望の現れなのだ

太陽を手に入れようと枝を伸ばす彼らは何をそんなに

意地になっているのだろう

きつと何も得られはしないのに

目を開けると痛かった

ああ 眩しすぎる太陽の光が容赦なく差す

彼は能天気だ

猛り狂う地上の熱気を怠惰に眺めている

満ち足りた表情の彼は何をそんなに喜んでいるのだろう

いつまでもそれは続きはしないのに

誰かが夏に向かって私を急かす

日差しは容赦なく私に触れる

嘆き悲しむそれを指先で優しくつまむ

風が葉を揺らしふと気づく

私は泣き虫な彼らのように腹の底から声を上げたことなどないことに

その慟哭に

その香りに

その痛みに

目を瞑ってやる

夏の姦しさも

煩わしさも

眩しさも

すべて美しい命の色なのだから

気高いその色彩はすべて

燃え尽きるまでは彼らのものなのだ

現 代 詩 部 門

友だち

友だちに

「一番の友だち」って

言われるのはうれしいけど

友だちに

自分から順番はつけない

みんな

友だちやから

福山市立駅家小学校六年 中嶋 蒼太

現 代 詩 部 門

音色

福山市立向丘中学校二年 宮脇 千歳

体育館に響くふえの音
僕は汗ながし 心を焦らせる
ボールが天井に届きそうだ
きれいな橋をかけながら
ボールは橋を渡りきる
もう一度
今度は落ちた
僕は全力で反対へと足を走らせる
頭の中をからにして
無我夢中で走り続ける
ボールが僕の元へ
力強く跳び 僕はゴールへの橋をかける
スパッ
その音と同時に機械が終了の合図をしらせる
審判が三本の指をふりおろす
僕はあふれそうなみだをこらえながら
満面の笑みをうかべた

現 代 詩 部 門

黒く染まつた筆箱

廿日市市立野坂中学校二年 豊浦眞二郎

忘れもしない

国語の授業でボールペンを使おうとしたとき

インクがこぼれた

忘れもしない

半紙で一生懸命ふいた

忘れもしない

ふいてもふいても

インクは広がっていくようだった

それはまるで人の裏の顔のようだった。

現 代 詩 部 門

コンタクトレンズ

あこがれだったコンタクトレンズ
めがねくん お疲れ様
コンタクトくん よろしくね

目につけるだけだから簡単よ
と言われても

でも怖い

上手く入らない

時間がかかる

指が近づくと怖い

目をとっさにつむる

まばたきをする

なかなか目に入らない

時間がかかる

嫌になる

でもつけない

福山市立城北中学校三年 新田 暁

やっとの思いで目についたコンタクトレンズ

視野が明るい

まわりまですごくよく見える

みんなこんなに明るい世界

みんなこんなによく見えていたの

明るい世界

右左上下まわりまで

すごくよく見えて嬉しい

良かった

このコンタクトレンズで

世界を見ていこう

これからの未来を見ていこう

明るい世界になるように

僕らがしっかり見ていこう